

頭の後からうなじにかけて、とろとろとした熱い流れが幾筋もできていた。頭蓋の形状になじまない堅い木の枕は、延髄を圧迫して首の骨を折り曲げようとしていたし、勝手に動いて頭をずり落とし、夢多き少年の眠りを妨げていた。その、首を折り曲げながら寝苦しき夜を過ごしている、黒というよりは青みがかかった髪の少年、さかきじよたは、冷房装置といえは枕元においた団扇だけという、まこと近代国家とは思えない、ましてや王族の住まう場所とは思えないこの長屋の物置で、今夜も眠ると言うよりは自分の意識が無くなるのを今や遅しと待ちかねていた。

ここは、カール帝国王都バウムクーベンの郊外にある、宮殿とは名ばかりのドールズ長屋である。この長屋には、ドリムランドを追われた八人の王族とその家臣達が暮らしていて、皆いつか故郷を竜族の手から取り戻そうと、帝国や周辺諸国へ働きかけをしたり、散り散りになってしまった祖国の人材を搜索したり、また活動資金の金策に走るなど、様々な活動を行っていた。

じよたは、今宵五〇回目くらいの寝返りを打ち、汗まみれの首筋を手でぬぐうと目を閉じて、自分が守るべき人の姿を思い浮かべ、そして彼女の名前をそっとつぶやいた。

「シェリル」

彼は、ドリムランドの小国家のひとつ、チェロンの姫君シェリル・フル・フレイムの付き人として、このドールズ長屋の物置に住んでいた。彼自身の出身は、南の大陸ヤマトであるが、世界の存在を揺るがすある事件に巻き込まれ、数奇な運命の縁で結ばれた彼女と出会い、方向音痴で靈感体質、人十倍の大食漢で、ついでに酒を飲むと暴れるという彼女がどうしても放っておけなくて、一緒に旅をし

てきたのだった。

「じよた、起きてる？」

その時、彼の耳に心地よいバイブレーションが響いた。それは彼が守るべき人、シェリルの声だった。彼は、自分のつぶやいた言葉が、彼女に聞こえてしまったかもしれないと思ってドキリとしたが、ひよっとして彼女が具合でも悪くなっただのかもしれないと思って跳ね起きた。

「どうしたの？」

いつの間にか、自室の扉が少しだけ開いていた。そして、そこから寝間着姿の少女が中を覗いていた。

彼女は、何種類かのフルーツが描かれたクリーム色の寝間着を着て、いつもは後で束ねている髪を下ろし、りんごの枕を抱えて立っていた。

じよたは思った。「いつもよりきれいだ」なんて、こんなことを口にしたら、きっと彼女に首を絞められるけど、でも、なんだか今夜はとても魅力的だなあと。

「今日、暑いでしょ。私、涼しい部屋を知ってるの。」

「ホント？」

彼は、昨日も一昨日も暑かったという事実は、あえて気にしない事にした。

「一緒に行かない？」

「うん。行こう！」

じよたは、このドールズ長屋に冷房の効いた部屋があるとは知らなかった。でも、そんな部屋があっても無くても、彼女と夕涼みに出かけるというのはいいアイデアだし、彼女の特殊な能力、霊感体質によって寒気がするというのも、真夏の楽しみ方の一つではないかと思つて、蒸し暑い部屋から飛び出した。

シェリルは、部屋から飛び出てきた彼の頭から、汗のしずくがぱらぱらと散るのを見て顔をしかめた。

「まず、シャワーを浴びてきて。」

「え？」

「汗くさいのは嫌よ。」

「シャワー、使ってもいいの？」

「いいから早く行きなさいよ。」

そう言うのと、彼女はそっぽを向いてしまった。

じよたは、普段は入ることが許されていない、彼女専用になつて  
いるシャワー室で、さっさと汗を流した。そして、自分の体から、  
ふうわりと彼女と同じ石けんの匂いがするのに気づいて、気持ち  
安らいだ。そして、これなら涼しくなかつたって眠ることができるな  
あと思つた。

「お待たせ。」

シェリルは、自室に続く扉に寄りかかつて、じよたが来るのを待  
つていた。そして、お風呂場から上がってきた彼の手を引っ張つて  
自分の方に引き寄せると、鼻の頭を彼の頭にくつつけて、彼の頭に  
口づけをして、ふんふんと匂いをかいだ。

「ん。まあ、合格。」

じよたは、オレンジ色の常夜灯の下で、彼女の寝間着の胸元を間  
近に見、ミルクのような香りをかいでしまつて、頭がクラリとして  
しまつた。

「じゃ、行きましょ。」

シェリルはそう言うのと、じよたの手を握つたまま彼を自室へと誘  
つた。そして二人は、部屋の中央に設置された天蓋付きベッド、い  
やその上に載っているミニチュアの家の前で立ち止まつた。

「さあ、このコテージの中は涼しくて快適よ。」

「え、これ？でも、少し小さいよ。」

そのコテージは、一メートル程度の立方体に、三角の切妻屋根が  
載つた、かわいらしいドールハウスのように見えた。

「ぐずぐず言つてないで、さっさと入りなさい。」

彼女は、そう言うとそのドールハウスのようなコテージの扉を開  
け、彼を中に押し込んで、自分も後に続き、扉を閉めた。誰もいな

なくなった部屋の中で、コテージは一瞬黄色い光を放つと、その光が消えるとともに、コテージ自体も見えなくなってしまう。

2

シェリルは、扉を後ろ手で閉めると、コテージの魔道力場がきちんと働いているか確認し、目の前に呆然として立っている、自分のかわいい彼氏の背中を見つめた。そして、これでうまくいくとは限らないけど、少なくとも父の敵である、あの憎たらしいファンネルに打撃を与えることができるだろうし、もし今後の計画が失敗したとしても、じよたに思いを遂げさせることができるから、それでいいよねと彼の背中に無言で問いかけた。

かわいい彼氏、じよたは、さっきから身動き一つしていなかった。恐らく動けないのだろうとシェリルは思った。動けば動くほどコテージの魔道力場に捕らえられ、同室した女性に対して、激しい渴きを覚えるのだから。何しろ、このコテージは、そのために作られているのだ。

「じよた」

シェリルは、いつまで経っても行動を起こさない彼氏にいらだつて、じよたを背中から抱きしめた。そして、彼が震えているのが分かったので、彼の頭をなでて頬ずりした。

じよたは、コテージに入った瞬間、空中から水中に潜っていくときのような感覚を肌にした。周囲に得体の知れないエネルギーが満ちているせいであった。そして、それは一歩歩くたびに自分の体にまとわりつき、水飴のようにねっとり密度を高めて、自分を包み込んでいった。でも、それが嫌というわけではなかった。むしろ、誰かに体を抱きしめられているかのような、安らぎさえ覚えた。

背後で扉の閉まる音が聞こえた。じよたは、そこに誰がいるか分かっていたけれど、すぐに振り向くことはできなかった。それは、今更ながら彼女と寝室で二人つきりということが、恥ずかしくなっ

てしまったからであった。

じよたは、シェリルが見つめているであろう、自分の背中がくすぐったいような気がして落ち着かなかった。それで、この部屋にはベッドが一つしかないけど、自分は床で寝るからいいんだ、彼女にそう伝えなければと思ったが、なぜか改まった感じがしてそう言い出せなかった。

「じよた」

その声を聞いたとき、彼は自分の体に確かに電撃が走るのを感じて、びくりと体を震わせた。そして、シェリルの胸が、おなが、腕が、ももが、ことごとく密着されていくのが分かって、接触部から体の芯に振動が伝わるかのような快感が走った。

じよたは、ゆっくりと彼女の方を振り向いた。彼女と目が合うと、お互いに両手を握りしめ、ゆっくりと口づけをした。そして、二人はベッドの上で重なりあつた。

3

ドールズ長屋こと、ウインドグラス宮殿の朝は早い。炊事場が一箇所しかないのに、作る朝食は八ヶ国分だからだ。もちろん帝国の料理人に頼むこともできるし、彼らの作る料理はこの上なくうまいのだけれど、帝国を信用していないドールズの面々は、自分達の家臣もしくは使用人達を使って朝食を作ることにしていた。

そういうわけで、じよたも早朝からシェリルのためにパンを焼いて、野菜ジュースをガラス瓶いっぱいに作り、ふんわり厚焼き卵やベーコンを焼いた物、それと彼女の好きなブルーベリージャムを準備していた。まあ、十人前くらいは用意していた。

じよたが部屋に戻ると、そこには背が高く、筋肉質な客人が待っていた。真っ赤なタンクトップに、ジーンズというラフな格好をしたその女性は、じよたに二、三度軽いジャブを食らわすと、にこりと微笑んで、彼の髪をくしゃくしゃとした。

「おはよ。元気か？」

自称ヴァンパイア娘のチャイム・ポロンだった。彼女がこのドルズ長屋にやってくるのは、特に珍しいことではない。彼女は、自分をシェリルやじよたの姉代わりだと思っていて、彼らの面倒をなにかと見てくれていたから。そして、彼らもまた、このまっすぐな性格の娘を慕っていて、いつも喜んで歓迎の宴、ささやかな食事会やお茶会を開いているのだ。

「おはよう、チャイム。」

チャイムが来るのだったら、もう少したくさん作ればよかったかなとじよたは思った。それにしても今朝は早いな。朝食の前にくるなんて。

「じよたの、へなちよこな料理でよろしかったら、どうぞ召し上がって行って。」

シェリルは、じよたの顔も見ずに、彼の押しているキッチンワゴンからパンをつまみ食いた。

今朝のシェリルは、ご機嫌斜めだなあとじよたは思った。その理由として思いつくのは昨晚の出来事しかないのだが、彼には彼女とベッドに入ったところから先の記憶が無かったので、理由をリストアップすることができなかった。そして、朝気がついたら二人で手をつないで寝ていて、彼女を起ささないように、そっと起きたつもりだったけど、でもやっぱり起こしてしまっ、何回か殴られた。やっぱり、それが原因だろうか。

チャイムは、彼らの様子がいつもとちよつと違う事に気づいている。シェリルはじよたの行動にいちいちケチをつけてはむすつとしているし、じよたは彼女のご機嫌をとりながら走り回り、時々恥ずかしそうに自分を見る。怪しい。そして、すぐにピンと来る物があったので、さりげなくまをかけてみる事にした。

「じよた、その首についたあざ、どうしたんだ？」

「え？あざがついてる？」

「うん。あたしによく見せてごらん。」

「ひよっとしたら、今朝シェリルにはたかれたからかも。」

「首をはたかれたの？」

チャイムは、じよたの首筋を調べるフリをして、シェリルの様子をそっとうかがったが、彼女はいつも通り目の前の大量な食物を黙々と摂取しているだけだった。さすがに単純なじよたとは違って、なかなかぼろを出さない。

チャイムは、なおもじよたの髪をかき分けて、そしてあざなんて無い、彼のうなじあたりにキスした。

「ひゃあ！」

「ちよつと、何するのよ！」

シェリルは、ナイフを握りしめてチャイムをにらんだ。

チャイムは微笑んだ。

「じよた、香水変えたのか？」

「ん？ううん。」

「そうか？おまえ、シェリルと同じ匂いがするぞ。」

「え？そうかな？ほら、シェリルが、ここにいるから、じゃない？」

シェリルは、明らかに動揺してしまったじよたに一瞥を加えると、また黙々と摂取作業にいそしんだ。

じよたは、今朝、シェリルに言われたことを思い出した。

「いいこと、昨晚のことは、あたしたちだけの秘密よ。たとえば、チャイムにだって、話しちゃだめ。分かった？」

チャイムは、うろたえているじよたを、両手を腰に当てて微笑みながら見下ろした。

「じよた。おまえ、とうとう男になったんだな。」

すると、シェリルが無然とした表情で振り向いた。

「残念でした！おこちゃまには効果が無かったのよ。」

私は何回キスしても起きないし、という言葉は飲み込んだ。

「そうか。そうだったのか。じよた、それはおまえが悪い。」

「ええーっ！僕が悪いの？」

「そうだ。おまえが不甲斐ないのが悪いんだ。」

「えと、それじゃ、今度こそ！」

「じよた！」

と言うが早いか、シェリルの鋭いびんたが、じよたの頬に炸裂した。今度こそ、本当にあざができた。

「ところで、何か話があるんじゃないかなかったの。」

シェリルは、その件については、もうこれでおしまいと言わんばかりに両手でテーブルを叩くと、むっとした表情でチャイムを見た。

「ああ、たいした話じゃないんだ。食べながら話すよ。」

しばらくの間、三人の周囲にはナイフやフォークをかちやかちやさせる音と、じよたはお箸を使っていたけれど、それから窓の外から聞こえてくる小鳥たちのさえずりだけが聞こえていた。

「お誕生日なの？」

食事を終えたシェリルが目丸くして言った。

「そうなんだ。二十歳になったよ。」

「おめでどう！」

食器を片付けていたじよたが言った。

「うん、ありがと。それで、我が家でささやかなパーティーを開くんだけど、一緒にどうかと思っただけ。」

チャイムは、柄にもなくちよつと照れながら言った。

「行こうよ、シェリル！」

「ああ、：うん。」

シェリルは、うつむいた。

「どうしたんだ？ やっぱり、あたしのパーティじゃ嫌なのか？」

「そんな事無い！ でも、今日は、ファンネルに呼ばれているのよ。」

「誰だ？ そいつ。」

「私の、：婚約者。」

しばらくの間、沈黙が続いた。

じよたは、何も気づかなかったフリをして食器を片付けると、キッチンワゴンを押して部屋を出ようとした。

「ちよつと待ちな。じよた。」



じよたは、チャイムに背を向けて、びくりとして立ち止まった。そして、恐る恐る振り向いてみると、そこには無表情のヴァンパイアが立っていた。

「シェリル、そいつは初耳だったよ。おめでとう、と言っているのか。」

シェリルは何も言わない。

「嬉しくないのか。」

シェリルはうつむいたままである。

「ひよっとして、帝国が決めたことなのか。」

シェリルはこくりと頷く。

「それで、おまえの気持ちはどうなんだ。」

シェリルはそれには答えない。

「じよた。おまえはどうなんだ。」

じよたは、こくりとつばを飲み込んだ。

「おまえの大事な姫さんが、他の男に寝取られていいのかよ。」

「あ、僕は、貴族でも王族でもないし、シェリルが、幸せになるのなら、それで：、ぐふっ！」

じよたは、チャイムの猛烈なボディアッパーを食らって、五〇センチくらい空中に浮いた。

「おまえ！今度くだらないこと抜かしてみろ。次は心臓を潰すぞ。」

じよたは、悶絶したまま床に跪いた。

チャイムは、小柄なじよたの襟首をつかんで持ち上げると、彼の顔を自分の顔にくっつけんばかりに近づけた。

「じよた、おまえ達の間には、昨晚何があったのか、あたしは知らないが、でも、シェリルの気持ちは、分かったはずだよな。」

「やめて！」

シェリルは、じよたをチャイムから引きはがすと、彼をぎゅっと抱きしめた。

「ご覧の通りよ。あなたのご想像通り。」

シェリルは、未だにお腹を押さえて苦しんでいるじよたの背中をさすってやると、ささやくように神聖魔道をかけて、彼を癒してあげた。そして、チャイムを見上げて言った。

「私の結婚は、祖国を復興させるにあたって、今のところ避けては通れない話なの。でも、私だって自分の幸せを捨てるつもりはないわ。全てのプランをあなたに話せるわけではないので、うまく説明できないのだけれど。」

シェリルは、自分の兄、メリル達の計画について、チャイムに話すことができないのもどかしかった。その計画では、正統を継ぐメリルの存在が重要視されていた。だから、彼女は兄の計画の邪魔にならない程度に、自由に行動するつもりであった。父の敵を討つために。

チャイムは、シェリルとじよたの頭をなでた。

「あたしは、おまえ達に幸せになってもらいたいだけなんだ。」

4

前日のお昼過ぎの事である。シェリルは、帝都バウムクーベンに新しくできた空中遊園地の開演式典に出席するため、その事前ミーティングに出席していた。

「以上、式典のプログラムについてご説明させていただきました。

何かご質問はございますか。ファンネル・バウム將軍」

頭のちよつと薄くなった、空中遊園地ポルカの企画・広報部長が言った。彼は、ハンカチで何度も自分の顔や首筋を拭きながら、スクリーンに映し出された空中遊園地のステージを指し示していた。

空中遊園地ポルカは、帝都バウムクーベン中心街の超高層ビルの上に建設された遊園地である。ファニーワールドの全世界に系列の遊園地が建設されているが、それら全てに共通しているのが、ビルの上に存在するということであった。そして、特に今回建設されたポルカは、複数のビルにまたがって建設された形式であり、その巨

大きさは世界一を誇っていた。

「そのプログラムに、追加したい項目があるのだが、修正は可能だろうか。」

將軍と呼ばれた若い男が言った。

シェリルは、ドールズのシートから彼の方を見た。彼は、階段状に設置されたシートのはぼ中央で、黒い制服を着た護衛の兵士5人に囲まれて座っていた。もちろん、シェリル達ドールズの面々にも護衛の兵士がついていたが、それは帝国の兵士であり、護衛というよりは監視されていると言ったほうが正しかった。というのも、ドールズの面々は完全に武装解除されていたし、自分達の家臣はひとりも同席させてくれなかったからである。

「どういった内容でしょうか？特別な舞台装置などが必要となりますと、ご希望に添いかねる場合がございますが。」

「いや、楽隊のひとつもあればいいのだ。私の婚約を発表するだけだから。」

その言葉を聞いた瞬間、シェリルは手元にあった水差しを、あいつの顔にぶつけてやろうかと思った。だから、こちらを向いて微笑んでくるファンネルに対して、ぎこちない笑みを浮かべるのが精一杯だった。

開演式典のミーティング前に、シェリルはファンネルに別室に呼び出されていた。彼女が、帝国の護衛に前後を挟まれて応接室に案内されたとき、彼はフードを深く被った女性と話をしていたが、シェリルがやってきたことに気づくと、フードの女性に外してくれと言った。護衛の兵士も、扉の外に待機するよう指示されて、部屋には、シェリルとファンネルだけが残った。

「そろそろ、式の準備をしたほうがいいと思うんだ。」

ファンネルは唐突に切り出した。

「…」

シェリルは、黙ってうつむいていた。

「帝都を流れる運河のほとりに、式を挙げるのにちょうどいい教

会があるんだ。それは、サン・マール教会と言ってね：」

シェリルは、ファンネルの話を黙って聞いていた。そして、これから自分はどうすればよいのだろうと改めて考えていた。兄のメリルの話によると、自分の目の前の人物こそ、父を殺した犯人らしかった。頼りないダメ君主候補の兄ではあるが、その性格から彼が自分に嘘をつくとは考えられないし、またその情報の出所がホウメイの兄、軍師のコウトウだと言われれば、かなり確かな情報と考えてよいはずだ。

彼女は、ぼんやりと兄のメリルのことを考えていた。彼は、まともな言葉遣いも知らないし、顔も決して整っているとは言えず、剣の腕もそこそこで、また優れた政治的能力があるわけでもなかった。しかし、こんなダメ君主候補だというのに、なぜか彼を慕う人は多かった。それは、裏表のない彼の人柄ゆえであった。馬鹿正直で思いやりがあるという性格は、そこいらのお兄ちゃんになれば望ましい性格であるが、こと国王の資質としては甚だ問題があると言わざるを得まい。しかし、彼のその能力の無さゆえに、彼を放ってはおけないと人が集まってくるのかもしれない、それもまあ、ひとつの王者の徳と言ってもよいのではないかと、と彼女は思っていた。

一方ファンネルは、兄と比較してずっとハンサムの部類に入るし、若くして將軍の地位に就くくらいだから、能力もあるのだろうと思った。ファンネルは、背が高く、がっちりとした体格をしていて、戦場を駆け抜ける仕事のせい、肌は褐色に日焼けしていた。黒い髪は、若干カールがかかっている、額のあたりに無造作にかかっていた。そして、粗暴な戦士達とは違う理知的で柔和な瞳は彼女を見つめていて、頬には小さな傷がいくつかあったが、それも彼に野性的な魅力を加えていた。きっと、もてるでしょうねえ。

しかし、彼が魅力的であればあるほど、シェリルは嫌悪感で鳥肌が立った。あなたは、どうしてそんな表情ができるのですか？あなたは、自分が殺した男の娘の前で、どうしてそんなに爽やかに微笑んだりできるのですか？

「竜族との交渉も一段落してきているから、もう少し我が国が圧力をかけてやれば、奴ら返還に応じると思うんだ。」

話は、いつの間にかドリムランドの件になっていた。

「奴らが、何のために突如君たちの国土を奪ったのか、その辺の事情についてはまだ不明なのだが。」

私も、あなたにお聞きしたいの。なぜ、私たちの国を襲ったの？ どうして私のお父様を殺したの？そして、あなたにとって、父を殺すのは、戦場で敵兵士を殺す事と同じだったの？だから何も感じないの？

「しかし、正統を継ぐ者がいる限り、我が国は、私は、あなたが祖国を取り戻すことに、全力で協力するつもりです。」

私にそれを信じろとおっしゃるの？

シェリルは、ファンネルが自分の国を襲い、父を殺したということを知っていると、打ち明けてしまおうかと思った。その方がすっきりするのではないか、お互いに楽なのではないかと思ったから。しかし、それでは目的は果たせないだろう。彼が何を考えているのかは分からないが、少なくとも自分の目的はきつと果たせなくなる。シェリルは、もう、今すぐ、刺し違えてでも、この男を殺してやりたいと思ったが、彼女のレイピアは預けてしまっているし、不意打ちでもなければ、この男には傷一つ負わせることはできないことも分かっていて。だから、この男が一番恥をかくように、体に傷を付けられなくても、心に大きな傷を負わせられるような時を選んでやると彼女は決意した。

5

「来ないかと思ってたよ。」

「来たんだよーっ！」

壁面いっぱいにつたの茂った洋館の入り口に、ブルーグレーのブレザーを着た子供が立っていた。言うまでもなく、じよたである。

彼は、右手をすいっと伸ばすと、まるで学校の教室で挙手するかのように手を伸ばすと、扉を開けて出てきた深紅のドレス姿の女性とハイタッチした。

「チャイム、お誕生日おめでとう！」

じよたは、左腕に抱えた包みをドレスの女性に渡した。

「ありがとう！」

チャイムは、じよたをぎゅっと抱きしめて頬にキスした。

「やっぱり、シェリルは来られないのか。」

「野暮用が終わったら、すぐに来ると言ってたよ。」

二人が宴の間に現れると、そこにはすでに魔界の住人達が集まって、歓談を楽しんでいるところだった。

「おお！ 媚殿。お待ちしておりましたぞ。」

「おじさん、こんばんは。」

じよたは、チャイムの父親が彼のことを媚殿と呼ぶのを、さりげなくにつこりと無視した。

「この子供が媚殿ねえ」

身長二メートル以上はありそうな、もじやもじやのパーマ頭に角が二本生えた酔っぱらいが、酔っぱらいの鬼が、じよたをまじまじと見つめた。

「思いやりのある、いい子なんですのよ。」

赤子を抱いた女性がそれに答えた。チャイムの母親だ。

「少し線が細くて、頼りなさげだがな。」

と、チャイムの兄。

「いやいや、媚殿は頼りになるさ。」

チャイムの父は、じよたをぎゅぎゅっと抱きしめた。

じよたは、コロンの香りの中で、しばらくの間だったらこの人達の家族でもいいやと思って、チャイムの方を振り向いた。彼女は、もちろんこの光景を見て喜んでいたけれど、でも、なんとなく寂しそうな表情をしていた。

「さて、お集まりの皆様、大変お待たせをいたしました。我が娘、

チャイムの婿殿をご紹介いたします。」

「いやあ、婿殿だなんて、そんな……」

じよたが照れていると、チャイムが近づいてきて彼のそばに立ち、彼の手を握った。

「今宵、我が娘は、めでたく成人の日を迎え、名実ともに魔界の貴族の仲間入りを果たすことができます。思えば二十年前、彼女の人間の父親にかけられた制約の呪文により、我が一族は……」

何気なく聞いていたじよたは、チャイムの父がしゃべった言葉に気づいてドキリとした。チャイムの人間の父親って何？

6

ベッドの中で、うなりながら身をくねらせている女がいた。彼女は、両手を自分の頬に当て、脂汗をかいていた。

「ちつくししょう！何だってこんなに牙が痛むんだ！」

まだ夜中であつたが、彼女は眠るのをあきらめ、階下に氷を探しに行った。階下には、夜型の生活をしている家族が起きていて、なにやら家族会議をしているようだった。

「おお、チャイム。牙が痛むのか？」

まだ何も話していないのに、どうして分かったのだろうと彼女は思った。

「それは、おまえが成人する証だ。」

チャイムは、自分の頬が腫れているのかと思い、鏡の中をのぞき込んだが、そこには赤い髪に青白い顔色の女が映っているだけだった。家族の姿が鏡に映らないのは、彼らが成人したヴァンパイアだからだと教えられていて、彼女はそれになんの疑いも持っていないかった。

「パパ、ヴァンパイアって、成人するときに牙が生え替わるんだっけ？」

「おまえは特別なのだよ。」

母と兄は何も言わなかった。チャイムは、家族の雰囲気と異なるものを感じた。彼女の家族は、夜に活動するから暗い雰囲気だと思われるけれど、実際には笑いの絶えない明るい家族なのだ。でも、今夜はしんみりとして、まるでお通夜のようなのだ。

「チャイム、おまえに話さなければならぬことがある。」

チャイムのパパ、スコチナー・ポロンは、口調を改めた。

「おまえの、成人について。それと、本当のご両親についてだ。」  
チャイムは、自分の父親が何を言っているのか、一瞬分からなかった。いや、すぐに理解したのだが、信じられなかった。

「パパ、その冗談つまんないよ。」

「残念ながら、これはパパ得意のジョークではないのだよ。」

スコチナーは肩をすくめた。

「あれは、今から二〇年前の事だった。」

7

聖騎士ラヴィアンは、部屋の中に転がっている骸、かつては自分の仲間であった三体の死体に、一人は自分の妻であったが、聖なる刻印を記した。これで、彼らがアンデッドとして蘇ることはないはずである。本来であれば、懇ろに弔ってやりたいところであるが、ヴァンパイアの巣窟ではそれもあきらめるしかなかった。しかし、とうとうここまで追いつめることができたのだ。払った犠牲は大きかったけれども。

と、彼は、密室の中に自分以外の気配を感じた。首筋がじりじりとする。彼は、左足を軸にして素早く振り向くと、その回転を利用して剣を下段から振り上げた。何かを斬る手応えがあった。

「うっ！」

しかし、思わず声を出したのは、ラヴィアンの方だった。彼が斬りつけたのは、自分が聖印を施した仲間、自分の妻だったからだ。

「仲間割れとは、いただけないね。」



入り口には、いつの間にか真っ赤な目をした紳士が立っていた。  
「なぜだ？確かに聖印を施したのに。」

「もうひとり、中にいらっしやったらしいな。」

紳士は、懐からたばこを取り出すと、余裕を見せて一服し始めた。

「君に、その女性の中の子供を斬ることができるかね？」

ラヴィアンの見ている前で、彼の妻の体から何かがい出てきた。真っ赤な血のかたまりのように見えるその異形の物体は、床にどちやりと音を立てて落ちると、目を光らせてはいはいをしながら彼に近づいてきた。

彼が赤子に気を取られている隙に、二人のヴァンパイアが空中から実体化して、彼の背後に接近した。そして、聖騎士にとどめを刺すべく包囲網を縮めていった。

ラヴィアンは、ヴァンパイア三体を屠るのは自分には不可能であると瞬時に判断した。しかし、屠るのは不可能であっても、その力を押さえ込むことはできると思った。おあつらえ向きに、三体とも自分に接近しているから。

「契約をしよう」

ラヴィアンは言った。

「人間よ、この期に及んで何をたくらむ。」

「この子が大人になるまで育ててくれるのなら、私の魂をやるう。」

「断ると言ったら？」

「神の力には抗えまい。おまえ達は、すでに私の制約の呪文の効果範囲にある。」

「そして、私たち三人は、聖騎士殿との契約、制約により、おまえを成人するまで育てることとなったのだ。」

「はいそうですか、とは信じられない話だな。」

「おまえが、昼日中外を出歩けるということが、パパには信じられないよ。」

あまり疑問に思ったことはないが、確かにそうかもしれないとチャイムは思った。

「ところで、その、ラヴィアンとかいう聖騎士は、その後どうなっただ。」

チャイムは、牙の痛みも忘れてスコチナーに尋ねた。

「彼の魂は、天に召された。いまいますが、彼の魂は、彼の信じる神の元へ行ったのだろう。人間め。やつは魂をやると言ったが、ワシらにやるとは言っていなかったのだよ。これは、契約違反じゃないかね。」

人間は、魔物に比べてずるがしこい。言葉の端っこをとらえて、平気で文意をねじ曲げたりする生き物である。

「そうかもね。でも、あたしはこの家で育てられたから、この家の家族の一員だと思っているし、そのラヴィアンさんたちには可哀想だけど、私の両親はパパとママしかいないと思っているよ。」

「パパだってそうさ。制約なんて関係ないと思っているよ。だけど、チャイム。おまえのその体は人間そのものなのだよ。ヴァンパイアとしての能力は、その牙の中に封印されてしまっている。そして、それを引き出すためには、人間の生き血を吸うしかない。」

チャイムは、血を見るのは嫌いだ。格闘技が好きで、武術の大会に出場したり、町のチンピラをたたんだりすることも時にはあるが、聖騎士から受け継いだ性格なのか、困っている人には優しいし、家族がしているように人の生き血を吸うということは、体が受け付けなかった。

「もし、それが不可能ならば、人間として生きていくという選択もある。だがそれは、君がポロンの家の一員ではなくなるといことを意味するのだよ。チャイム。」

じよたは、チャイムの寝室から、ぼつんとひとつだけ外灯のついた庭園を見下ろしていた。外灯の周囲には、時折黒い物体が飛行しているのが見えて、それはこの家に住んでいるコウモリに違いなく、彼は外からも監視されていることを理解した。

部屋の主は、彼にちよつと待っていると言って、荒々しく部屋を出ていってしまった。彼は、この屋敷からすぐにでも脱出したかったが、チャイムを見捨てていくのは嫌だったので、ぼんやりと窓の外を眺めながら、彼女と自分の将来について考えていた。

もともと、人間とヴァンパイアは、相容れないものである。ヴァンパイアが繁殖するためには、人間を犠牲にしなければならぬからだ。だから、人間は危険を取り除くため、ヴァンパイアを殲滅しようとするわけである。

じよたは、チャイムがヴァンパイアになる道を選ぶか、それとも人間になるかは、彼女自身が決めることなので、もしヴァンパイアになると言ってもそれはそれでいいと思っていた。どちらを選んでも、彼らが友人であることに変わりはないと考えていたからである。ただ、彼女がヴァンパイアになるためには人間の生き血が必要なのであるが、そのために自分の生き血を使うという事には反対であったし、もちろん、媚殿にされるのも嫌だった。

「うん、お友達だよ。」

その時、部屋の扉が荒々しく開いて、赤いドレスから赤いつなぎに着替えたチャイムが現れた。所々返り血を浴びている。

「待たせたな。すぐに出かけるぞ。」

チャイムは、そう言うとしよたの手を引っ張って、地下のガレージへと駆け下りた。そこには、顔を腫らせた黒服の男達がいて、彼女のシューター、クルセイダー・ツールのドアを待っていた。

チャイムは、じよたを助手席に押し込め、シューターを急発進させ、斜路をジャンプして屋敷から脱出した。その夜、帝都では、一晩中サイレンの音が鳴り響いていた。

その朝、シェリルは怒りではらわたが煮えくりかえっていた。実際、本当にお腹がすいているということもあって、文字通りお腹の中が煮えくりかえって、ぎゅうぎゅうと音を立てていた。直接の原因は、じよたが朝ご飯を作っていなかった事であるが、彼が朝寝坊をしたというわけではなかった。それどころか、なんと彼はチャイムの家に行ったまま戻らず、彼女と夜通しドライブをして、そのまま帰らなかったらしいのだ。

「朝帰りとは、いい度胸してるじゃない。」

シェリルは、椅子の上で足を組むと、猛禽類が獲物を狙うかのごとき眼光を扉の方へ向け、獲物が入ってくるのを今や遅しと待ちかまえていた。

しばらくすると、ドールズ長屋の外から、鶏が首を絞められたかのような音が聞こえてきた。シューターの急ハンドルの音だ。そして一拍後、重たいドアの閉じる音がして、長屋の廊下をがっごつと歩く足音が近づいてきた。シェリルは、扉が開く前に入ってくる人物が誰だか分かったので、ヴァンパイアよけの道具を用意しておけばよかったと思った。

「入るぜ」

予想通りの人物であったが、想定より一人少なかった。

「おはよ、チャイム。彼は、どこ？」

シェリルは、静かな怒りを瞳に込め、目を細めてチャイムを睨んだ。そして、チャイムの朝っぱらの訪問も非常識だが、着ている物も真っ赤なつながだなんて、TPOを考えてほしいものだと思った。

「まさか、まだ帰っていないのか。」

「一緒にドライブしてたんでしょ。聞いたわよ。」

「あいつは、途中で降ろして帰らせたんだ。あたしが囮になろうと思って。そして、宮殿に戻ったら、朝までおまえを抱きしめて守

ってやれって、言っておいたのに。」

「でも、まだ帰らないのよ。」

カール帝国の治安は悪い。帝都バウムクーベンでさえ、夜通し遊び歩く度胸のある人間はいない。それは、盗賊が出没するということもあるが、それ以上に魔物と遭遇する可能性が高いからである。例えば、ヴァンパイアのような魔物だ。

「すまん！あたしが宮殿まで送ってやればよかったんだ。」

「謝ってもらわなくてもいいわ。」

シェリルは、そう言うのと立ち上がって自室に戻った。そして、しばらくしてチャイムの前に姿を現した。彼女は、革鎧の上に白い金属の胸当てを着用し、愛用のレイピアを左腰に下げ、反対側には、恐らく魔道の品物であろう投擲用の小刀を5本ほどベルトに差していた。長い髪は後でひとまとめにされ、彼女が歩くたびにポニーテールがふりふりと揺れていた。

「いきなりそんな格好して、どこに行くつもりなんだ。」

チャイムは、シェリルの気持ちに痛いほど分かったので、彼女の肩を優しく抱いて言った。

「あたしの知り合いに情報屋がいるから、そいつなら何か知っているかもしれない。」

シェリルは、そんなチャイムの様子が眼中に無いかのごとく、そのまま突き進んで行こうとした。というよりも、それは歩くというよりは倒れ込むという表現が正しかった。彼女はその場に跪くと、げほげほと咳き込んだ。そして、床に赤い斑点が生じた。

「シェリル！どうしたんだ？」

シェリルは、なおもげほげほと咳き込んだ。口を押さえている両手からは、真っ赤な鮮血がこぼれ落ち、彼女の白い鉄の胸当ては、真っ赤に染まっていた。

ベッドの上に真っ白な顔色をした少女が横たわっていた。彼女の傍らには赤い髪の方が座っていて、心配そうに少女の顔をのぞき込んでいた。しばらくすると、横たわっていた少女の意識が戻った。

「疲れていたんだな。」

赤い髪の女チャイムは、そう言うのとベッドに横たわる少女シェリルの頭をなでてやった。

「じよたには、黙っててね。」

「ん？」

「あの子、気が小さいから。」

くふ、くふん。シェリルは、また小さく咳き込んだ。

「ああ、分かった。今、ヒーラーの人が、もう一度癒しの魔道をかけてくれるからな。すぐ楽になるぞ。心配はいらないよ。」

そう言ったチャイムであったが、医者のお話を思い出して、全身がずっしりと重くなるような、暗鬱な気持ちになっていた。彼女の全身に、多発性の癌が存在するなんて。

「このこと、ここ。それから、こっちにも。」

チャイムは、頭のはげ上がった五〇代くらいの医者にも小部屋に案内されて説明を受けていた。部屋の中央には円筒形のスクリーンがあつて、そのスクリーンには、シェリルの患部の透過図が立体的に映し出されていた。医者は、その図に空中鉛筆で印をつけた。

「それが、何なんですか？」

「あなた、身内の方ですか？」

「ええ、姉です。」

「検査しなければ、はっきりとしたことは分かりませんが、恐らく、これは多発性の癌と思われます。今のままでは、恐らく持ったあと半年でしょう。」

チャイムは、全身の血液が逆流するかのようなショックを受けた。

「どうすればいいんですか？」

「基本的には、手術をして取り除くのが良いと思われます。が、患部がこれほど広範囲に広がっていると、取り除くこと自体が命取

りになりかねません。」

医者は、シェリルの胸部から腹部にかけての透過図を拡大させたり、縮小させたりして患部の場所を確認していた。

「魔道を使えばいいのでは？」

「私は、病気を治す魔道というものを聞いたことがあります。手術の傷を癒すのによく使用したりしますがね。別に、商売敵として考えているから教えない、というわけではありませんよ。うむ。ただ：」

医者は、あごに残ったひげを、ぐりぐりといじりながら、言うべきかどうか逡巡した。

「ただ、何ですか？」

「いや、世の中には、自分の生命力を消費して、他人の病気を癒す能力を持ったものがいる、という話は聞いたことがあります。」

「それを使えば治るんですね。」

「必ず治るとは断言できません。それに、そんな神のような自己犠牲の精神を持った人物など、私は見たことが無いし。もし、仮にいたとしても、その人物が治癒できる患者の数には限りがあるとすることは理解できますね。その人物のHP以上は治癒できないのですから。」

チャイムは、シェリルの頭をゆっくりとなでながら、ヒーラーがシェリルの胸や腹に手をかざすのを見ていた。そういえば、じよたの奴も時々こうやって傷を癒していたことがあったっけ。自分の傷には効果が無いから、あんまり役に立たないとか言っていたけど。

「ねえ、チャイム。」

「ん？」

「私、もう長くないんでしょ。」

「ばか！怒るぞ。」

シェリルは、首をすくめて布団の中に隠れた。

「私、分かっているの。これは、チェロンの呪われた宝石のせいだから。」

「なんだそれ？」

「持ち主に災いをもたらす宝石があるのよ。チェロンの国王であることを示す宝石なんだけど。迷惑な話でしょ。」

そう言うと、シェリルはくすつと笑った。ヒーリングが功を奏したのか、大分顔色が良くなってきた。

「そんな宝石を持っているのか？」

「王城の地下倉庫に保管されていたんだけど、私、子供の頃、それで遊んだの。青く光る綺麗な石だったから。」

「国王の象徴じゃあ、捨てるってわけにもいかないわけか。」

「その宝石を身にまとっていた王族は、ことごとく血を吐いて死んだわ。今は、もう竜族の手に渡ってしまったかもしれないけど。あいつらに呪いが降りかかればよかったのに。」

ヒーラーは、二人に施術の終了を告げると退室した。

「それより、早くじよたを探しに行かなきゃ。」

「大丈夫。あたしの知り合いの情報屋、シマコウモリのモリシマに連絡しておいたから、きつと探し出してくれるよ。それより、早く元気にならなくちゃ。じよたも心配するよ。」

「うん」

シェリルは、にっこりと微笑んだ。

1 2

ザン・エルフと名乗ったその少女は、魚のアタリを待つ釣り師のように、じよたに結びつけた縄を時折くいくいと引っ張りながら、小窓から外を眺めていた。そして、いらいらと貧乏揺すりをしたり、誰かが通りを通過するたびに、ちつと舌打ちしたりしていた。

「最初に言っておくけど、私はあんたを殺すなって命令は受けているけど、傷つけるなどは言われてないのよ。」

そう言うと彼女は、その小さな手の中に収まるくらいの小刀を、お手玉のようにもてあそぶと、じよたの方向に投げつけて、ダーツ



を楽しむかのように何本も壁に突き立てていった。そして、彼の頭の周囲に、花びらが広がるように小刀を配置した。

「それにしても、ころっと騙されちゃったよね。あんた。もう少し用心深くしないとダメよ。この町では生きていけないよ。」

じよたは、自分のお人好しな性格や注意力の無さを呪った。普通に考えれば、深夜一人歩きする子供などいるはずがない。しかもこの町である。いるとすれば、それは人間のふりをした妖魔か、殺し屋だろう。もちろん彼女は後者の方だ。

「まあ、私のご主人様に感謝するのね。命は奪うなって言ってたんだから。あ、来た！」

しばらくすると、部屋の中にローブを深く被った女性が、供の者を2人ほど連れて入ってきた。

「お久しぶりね、じよた君。」

じよたは、ローブの女を見た。その声には聞き覚えがあった。嫌な思い出しかないが、彼女のことははっきりと覚えていた。

「ミレーネ、さん？」

「元気にしてた？」

ミレーネは、ある新興宗教の信者で、じよたを生け贄にするために、彼を誘拐した過去があった。また、その事件でシェリルとじよたは出会い、二人で力を合わせてミレーネを撃退し、以後ずっと一緒に旅を続けてきたのだった。

「あなたとは、よくよく縁があるのね。ファンネルからは、あなたを始末するように言われているのだけど、ただ殺すのはもったいないじゃない？きつと、何かあるのよ。本当に、現人神を降臨させるための鍵となる人物なのかもしれないわね。あなたは。」

その時、部屋の扉がノックされた。皆、一斉に扉の方を振り向いた。

「ザン・エルフ」

ミレーネは、自分の部下である殺し屋の娘に、外を見張っていないのか？と無言でサインを送った。ザンは、首をふるふると左

右に振り、見張っていたけれども、全く気づかなかつたと返事した。ミレーネは、あごで扉を指し示すと、扉を開けるよう指示した。ザンは、ゆっくりと扉を開けた。

扉を開けると、そこにはちよび髭を生やした黒服に黒いサンングラスの小男が、岡持を持って立っていた。

「まいど、どうもごぜます。中華ミミズ屋でごぜます。ご注文のんにぐ抜き餃子、ひやぐ人前、おどどげに上がりました。」

男は、ザンが止める間も無く、ひよこひよこ部屋の中に入ってきた。

「ちよつと、そんなもの頼んでないわよ。」

ザンは、サンングラスの男の背中を、ダガーでぶすぶすと刺しながら言った。

「ありま！まんず、まづがいだがい？こりはどうも、すんづれいすました。たすか、ごずう番街、めモザどおる、いつばんつの、イレエ様がら、ご注文さ、うげだと思っただども。」

ザンは、殺し屋である自分に気づかれずに、外を見張っていたはずの自分に気づかれずに、部屋の前までやってきたこの東北東訛りの男が怪しいと思っていたのだが、男の風体や体格、身のこなしなどから、戦闘能力は低そうだと判断して、今は黙って様子を見るだけにとどめ、ミレーネの命令を待つことにした。

「ひやぐ人前たべだら、ただなんだけんども。」

「いらぬわよ、そんなもの！さっさと引き取って帰ってちようだい！」

「まんず、もうすわけねえ。」

サンングラスの男は、乱杭歯を見せてにっこりと笑うと、部屋を出た。ザンは、はっとしてじよたの方を見たが、彼は後ろ手に縛られたまま、まだそこにいた。

「ザン・エルフ」

ミレーネは、あごをくいっと扉の方に向けると、無言で今の男を始末しろと命令した。ザンは、うん、と頷くと扉を開けて外に出た。

「いた！」

ザンは、屋敷を出て門柱のところから通りを見回すと、五〇メートルくらい先に、ひよこひよこ足を引きずりながら歩く黒服の男がいるのを発見した。それで、彼女は足音を消して風のように男を追いかけた。

「あいつ、結構足が速いじゃない！」

ザンは、黒服を追跡していた。しかし、彼女がどんなに頑張っても追いかけても、彼我の距離は一向に縮まる気配はなかった。彼女は、ターゲットを尾行する際には、つかず離れずの距離を保つように気を遣っていたが、今回は全速力で走っていた。それなのに、一向に距離が詰まらないのである。

「おかしい。なんでよ。」

おかしいと言えば、自分はずっと外を見張っていたが、あの男が入り口から門柱までたどり着くところを見なかった。そして、ミレ―ネに命令を受けたとき、自分は一瞬だけ外から目を離してしまっただけだが、その隙に門を通りすぎてしまったのだろうか？扉から門柱までは、一〇メートルはあるはずだが、その距離を一気に移動したのだろうか？

「そんなに素早く動けるものなの？」

そして、よく考えればおかしな点はまだあった。岡持を持ったままの状態で、こんなに早く走ることができるのか。しかも、足を引きずるような、ひよこひよこした歩き方で、自分の全力ダッシュに對抗することができなのか。

ザンは、背筋にぞくりと寒気が走った。そして、このまま追いかけていてはまずい、引き返さなければいけない、そしてミレ―ネ様が危ないと思った。しかし、彼女の体は、粘性の高い液体の中を移動しているかのように、強力な慣性力が作用して、容易には立ち止

まることさえできなかった。魔道については詳しくないザンであったが、さすがの彼女もこれは妖魔のしわざに違いないと気づき、自分はその術中に完全にはまっている事を悟った。

「あいつは、きつと、…あの屋敷から出ていない！」

その時、彼女の背後で爆発が起こった。ザンは驚いて蹴躓き、地面に叩きつけられそうになったが、素早く体をひねると体勢を立て直して着地した。

「ミレーネ様！」

彼女が振り返ると、屋敷の方向に砂埃が舞い上がっているのが見えた。彼女は、いつの間にか隣の街区まで走り込んでいた。

「やられた！」

彼女は舌打ちすると、ミレーネの屋敷に向かって走り出した。

14

ゆつくりと砂埃が晴れてきた。じよたは、爆発の衝撃から立ち直ると、自分の手足がついているかどうかさすって確認した。そして、彼は自分を縛っていた縄が全て切断されていて、さっきの黒服の中華ミミズ屋の出前が、自分のそばにいることに気がついた。

「どうも、お初にお目にかかりやす。モリシマと申しやす。ちと騒々しいご挨拶になりやしたが、ご無事でなにより。さ、今の内に脱出しやすぜ。婿殿。」

「婿殿？」

じよたは、このセリフで彼が誰の仲間であるか分かってしまった。そして、チャイムはやっぱり自分をお婿さんにしたがっているのかなと思った。

その時、じよたは瓦礫の中で何かが動いていることに気がついた。それは、白いローブをまとった女、ミレーネであった。もともと、彼女のローブは、吹き飛ばされて無くなっていたけれど。彼女は、体中に木材や石の破片が突き刺さっていて、すでに虫の息であった。

「とどめを刺しておきやしょうか？ 婿殿。」

「婿殿はやめてください。それと、とどめもダメです。」

じよたは、扉の方、爆発の中心方向を見た。そこには、ミレーネの従者二名が横たわっていた。手足があらぬ方向に曲がったり、千切れたりしている彼らが倒れている床には、べつとりとした赤い池が広がっていた。じよたは、彼ら二名はすでに自分の力では救うことが出来ない判断し、ミレーネのそばにしゃがみ込むと、両手を彼女の背中に乗せて、自分のエネルギーが彼女の中に入り込む様をイメージした。

「むこ……。ああ、急がないと、さっきの奴が戻ってきやすぜ。」

モリシマは、腕を組んで片足をぱたぱたとさせながら、扉のあった大穴の方向を見張った。

「じよ：た：くん」

「黙っててください、ミレーネさん。あなたも危ないんです。」

じよたは、ミレーネと自分及び爆発の中心の配置から、彼女が自分の盾になっていたのだと思った。それは、単なる偶然なのかもしれないが、自分がほとんど怪我をしていないのは、彼女のおかげだと思った。また、この爆発自体、自分の仲間によって引き起こされた出来事なのであるから、彼女を放っておくことはできないと思った。それにしても、爆発の規模からいって、彼女が盾になってくれなければ自分も相当な重傷を負っていたはずである。魔界の住人には、人間のもろさが分からないのだろうか。まあ、チャイムなら大丈夫だったかもしれないけど。

ミレーネは、自分の背中から熱いものがぐいっと体内に進入してくるのを感じた。そして、その熱感はずつくりと全身に広がっていき、体がぼかぼかと暖かくなった。息苦しさが無くなり、傷の痛みもほとんど感じなくなった。彼女は、この能力を知っていた。この能力は、自分の生命力を削って他人に分け与える、自己犠牲の能力だった。そして、彼女は思った。自分の人選は間違っていないかったと。この子供を殺さなくてよかった。現人神とは、この子供そのも

のに違いない。

「ミレーネ様！」

吹き飛ばされた扉、扉のあった大穴から、小柄な少女が飛び込んできた。殺し屋の娘ザン・エルフだ。

「やれやれ、言わんこっちゃない。」

黒服のモリシマは、両手にダガーを握りしめ、じよたとザンの中間地点で盾になる構えを見せた。

「みんな、…死んでいるの？おまえら、許さないわ！そのガキ！ミレーネ様から離れなさい！」

ザンは、ミレーネに近づこうと一歩前に進んだが、黒服が立ちふさがるので、腰に差してある銀のダガーを後ろ手に確認した。銀の武器ならば、妖魔にもダメージを与えることができるはずだ。

「もう少し回復すれば、動かしても大丈夫だと思う。」

じよたが、ぼそりと言った。

「はん！ダメよ。そんな事言たって、死んだ仲間はずっとこないじゃない。どうしてくれんのさ。」

「誘拐っていう手段を用いた時点で、こういう結末も想定内だろ？違うかよ？」

モリシマは、ザンを睨み付けた。

ザンはいり返す言葉が見つからなかった。彼女は、こちらは二人も殺されているのに、相手の言いなりになるなんて悔しくて涙が出そうだった。しかし、自分の大切な人は、くそつたれのガキに接触しているし、下手に動けば殺されてしまうかもしれず、身動きが取れなかった。

1 5

「ザン・エルフ・ンイ？」

「…そうです」

応接室のふかふかのソファに腰掛けた少女は、その沈み具合が気

に入らないのか、何度も座り直しながら答えた。

「ンイなんて、奴隷に付ける蔑称は、あなたには必要ないわ。今日から、あなたの名前はザン・エルフよ。いいわね。」

「はい！」

王都バウムクーパーの孤児院で、ザンはミレーネに出会った。ミレーネは、カール帝国の各地を廻りながら孤児院に寄付をしたり、宗教的な教えを説いて廻ったりしていた。宗教というものは、最初は皆善意で始まるものらしい。ミレーネも、現人神をこの世に降臨させ、恵まれない人たちを救うのだと信じて布教活動に努めていたのだ。しかしザンは、ミレーネが幹部になり、その護衛として彼女に付き従うにつれて、この組織がまともな集団ではないことに気づいた。

ザンが、初めて幹部のみが出席できる宗教的儀式とやらを覗いた夜に、彼女はミレーネの部屋を訪れた。

「ミレーネ様」

「どうしたの？ザン・エルフ。」

「今日の、儀式で、子供が殺されていましたよね。」

「…見たのね」

ザンは、どきりとして思わず身構えた。そして、この屋敷から脱出する、もっとも確実なルートを頭に思い描いていた。

「確かに、私たちがやっていることは、あの宗教的儀式は、賞賛されるような、まともな行為ではないわね。」

「私も、殺されるんですか。」

「あなたは、私の妹だと思っているわ。だから、そんな事をするはずがないでしょう。」

「でも、誰かが殺されていくんですよね。誰かを助けるために、誰かを幸せにするために、誰かを殺していかなければならないなんて、そんなのおかしいです。」

ミレーネは無言だった。

ザンは、やっぱり言わなければよかったと後悔した。ミレーネが

言うとおりに、彼女が自分を殺すはずがないし、知らないフリをして、一緒に暮らせればそれで良かったのではないか。そして、彼女は思った。これでもう終わりだと。自分のささやかな幸せは、全て壊れてしまうのだ。

「ひっ、ひっ…」

ザンは、悔しくて涙が出ってしまった。自分は、孤児院のつらい生活から救ってくれた彼女を裏切ってしまった。だから、その報いを受けるのだ。

ミレーネは、ザンを抱きしめると、よしよしと頭をなでてやった。

「ザン・エルフ、あなたの言うとおりに。あんな事、やめなくてはいけないわ。でも、私の彼が行動を起こすまで待っていて。ファネルなら、きっとなんとかしてくれる。だから、それまで私の側にいて、力になってほしいの。」

ザンは、ミレーネの胸の中で、きつとこの人の力になるんだ、この人のためなら命を捨ててもいいと思って、ひとしきり泣いた。

16

そのミレーネが、今や絶体絶命のピンチに陥っていた。彼女は、爆発によって重傷を負っており、すでに虫の息だった。じよたとかいうガキが、魔道？らしき力で治癒しているが、その行為はいつか見た宗教的儀式のように見えた。虫が走る！

「あたしは、ミレーネ様の力になって、子供達を守らなければならぬよ。」

「僕だって同じだ。シェリルを守って、力になるんだ。」

「そんな事、あたしは知らない！」

ザンは、頭を左右に振って、じよたのセリフを頭の中から追い出した。そして、自分に暗示をかけるように、自分を説得するようにゆっくりと言った。

「そんな事、あたしは知らない。あたしは、ミレーネ様の力にな



るの。だから、そのために、あんた達を殺さなければならぬのよ。」

「だから、もう少し回復すれば、きつと……」

「あんたなんか信用できない！」

「おやめなさい、ザン・エルフ。」

ミレーネは、今にもじよた達に飛びかかろうと身構えているザンにそう言うと、またぐったりとして動かなくなった。

「ミレーネ様！」

ザンは、じよたを押しのけるとミレーネのそばに跪いた。

「ミレーネ様、すっかりしてください。今、助けを呼びます。」

ザンは、自分が神聖魔道を使うことが出来ないのが悔しかった。

あれは、呪文の言葉を暗記すれば誰にでも使用できるというものはなくて、それこそ宗教的な儀式を通過しなければならぬらしいかった。

「媚殿。今の内、ですぜ。」

じよたは、むっとした表情でモリシマを見た。そして、ザンに向かって言った。

「ミレーネさんは、一番重傷な胸部の出血は止めてあるけど、他はほとんど治っていない状態だから、今動かすと、また出血するかもしれないから気をつけて。」

「知らない」

ザンは、ぶっきらぼうに言った。

「早く出て行きなさいよ。今回は見逃してやるから。でも、許したわけじゃないから。この次に会ったときは、あんたのはらわたをえぐり出してやるから、そう思いなさいよ。」

じよたは、自分に背中を向けて話している少女に、二つ三つ言葉を返してやりたかったが、今は何を言っても無駄だろうし、ぼやぼやしていると、せっかくミレーネの傷を回復したのが無駄になると思っ、そのまま立ち去ることにした。

「お断りします。」

青白い顔色をした少女が目を細めて言った。

「先日も言ったとおり、挙式の前に、一度式場の下見をする必要があると思うのだが。この間は、何か予定があるとのことで延期したけど。」

浅黒い顔に健康的な白い歯がきらりと光る男が、肩をすくめて両手を上に向けながら言った。やれやれといった表情である。

やれやれはこっちだと、青白い顔色の少女シェリルは思った。お客様の次は、とうとうじよたにまで手を出したくせに。じよたが無傷で戻ってきたからいいようなものの、怪我でもしていたらただではすまさなかつたのよ。

「確か、身内の方が怪我をして、入院していらっしゃるとか。」

「ん？ああ、彼女のことなら心配はいらない。優秀な医者とヒーラーが付き添っているから。何も問題は無い。」

シェリルは、彼女が怪我をした理由について触れるつもりはなかったが、少なくとも自分がファンネルならば、彼女の側に一緒にいてあげるだろうと思った。自分が、じよたの側を離れたくないように。今回は、たまたま怪我をしなかったけれど、また誘拐されるかもしれないし、殺されてしまうかもしれない、そう考えたら一時も彼の側を離れたくない、普通はそう思うはず。それとも、あの女性には、あなたにとってどうでもいい人なの？

結局、あなたにとって、自分以外の人間の価値なんて、そんなものなのね。シェリルは、もともとファンネルとの間に特別な感情を抱いたことは無かったが、青年士官の底の浅いところに気付いて、自分の作り上げていた幻想が崩れていくのを感じた。完全無欠の人間っていないものよね。

「開演式典の翌日には、どうしても外すことの出来ない、重要な予定が入っておりますので、式場の下見は後日にしてくださいませよう、お願い申し上げます。」

「ずいぶん堅苦しい言い方だね。自分の夫に。」

シェリルは、部屋から立ち去ろうとして、扉の前に立つと、振り返って言った。

「まだ、夫ではありません。」

ファンネルは、椅子から立ち上がると、シェリルの方に近づいた。そして、彼女の肩に手をかけた。

シェリルは、嫌悪感と恐怖心で、早くこの場を立ち去りたいと思った。

「下見は、ご自分でなさってください。」

彼女は、そう言う素早く扉を開けようとしたが、ファンネルに押しとどめられてしまった。そして、彼はニコリと微笑んできた。

「今日は、お加減がよろしくないのでしたね。それではまた、ご気分によろしいときに話をするにしましょう。」

シェリルは、返事もせずに部屋を出ると、ファンネルに触られた肩をがしがしと引っ掻いて、そこに残った感触を消そうとした。

帝都バウムクーベンの中心街上空で、小さな光りが幾つか炸裂したかと思うと、数秒遅れてパンパンという音が聞こえてきた。真夏の青空には巨大な入道雲がそびえ立っていて、朱色と黄色の縞模様のアドバルーンが四つ、二連式の超高層ビルの上頂上に設置されたお椀の四隅から上がっていた。お椀の上には、三角の塔や、風車のようなものが見え、また細長い管がウネウネとお椀の縁に沿って波打っていて、その上には小さなカプセルが五つくらいつながって動いていた。

そんな光景を、三人の男女が郊外の丘の上から眺めていた。黒髪の美少女は、隣に立つ青い髪の少年と手をつなぎ、その手をもてあそびながら、背後に立っている女性に体を預けていた。青い髪の少年は、遠くの町並みを眺めたり、時折ちらりと隣の少女を見たりし

ながら、少女の手を両手を重ねるようにして握り返していた。そして、筋肉質で背の高い赤い髪の女性は、彼らの背後に立って二人の肩を抱いていた。彼女は、二人の頭に頬ずりして、その感触を確かめ、二人のぬくもりを体にしっかりと記憶させると、ゆっくりと離れていった。

結局、チャイムは人間になる道を選択していた。ヴァンパイアになつたら、昼間ドライブに出かけられなくなるし、人間の生き血も飲みたくなかったからだ。それに、なによりも永遠の命を生きるより、限りある人生を無駄にしないように一生懸命生きることを選ぶうと思つたのだ。シェリルのように。

「それじゃあ、あたしは行くよ。」

そう言うと、チャイムは真っ赤なシューター、クルセイダー・ツ―に乗り込んだ。

「ほんとは、今にも泣き出しそうな顔で、シューターの窓にしがみついた。」

「なあに。しばらくの間、世界を旅するだけさ。人間になつた以上、もうあの屋敷に住んでいるわけにはいかないしな。」

それに、シェリルの病気を治す方法を調べなきゃいけないし、という言葉は飲み込んだ。

「元気でね」

白い顔をしたシェリルが言った。

「そっちこそ！無理するんじゃないぞ。」

シェリルはにっこりと微笑んだ。

「じよた、これからはおまえがシェリルを守っていくんだ。ずっと、守っていかなきゃならないんだ。分かるな、あたしの言っていることが。」

「うん！僕は、ずっと、一生シェリルを守るよ。」

「ったり前じゃない！」

シェリルはそう言うと、じよたの背後から彼の首っ玉に抱きつい

た。

チャイムは、そんな二人の様子に満足して、シューターの窓を開めると、アクセルを踏み込んだ。

真っ赤なシューターは、七色の霧を吐き出しながら、でこぼこの道を走り去っていった。黒髪の少女シェリルと、青い髪の少年じよたは、チャイムのシューターが見えなくなるまで、ずっとその場を動かなかった。

「ねえ、じよた。これから、あのポルカへ行ってみようよ。」

「でも、帝国の使いの人が来てたけど。」

「いいのよ。もう断つてあるんだから。だから、君のシューターでポルカに行こうよ。シューターなら、疲れたときは眠って帰れるでしょう。」

「え？シューターだと眠って帰れるの？」

「私が眠るの。君は運転するの。ったり前じゃない！」

丘の上にこうと強い風が吹くと、風に乗って楽しげな曲が小さく流れてきた。少女は、左腕で少年にしがみついたまま、少年の頭にげんこつをぐりぐりと押しつけると、また何か文句を言っていた。少年は、苦笑すると彼女を背負い、しっかりとした足取りで宮殿に向かって歩いていった。丘の上を吹き抜ける風に逆らって、ゆっくりと歩いていった。